

# ヒラメ放流技術開発事業（抄録）

石田 陽司・山添 喜教・小島 博

ヒラメの栽培漁業の推進および技術の確立を図るため、平成元年度より放流技術開発事業を行っている。今年度は、開放的な砂浜海岸である阿南市中林海岸をフィールドとし、放流直後のヒラメ種苗の動向を重点的に解明することにより、当海域における最適放流サイズを明らかにすることを目的とした調査を行った。また、放流効果の地理的波及範囲を大まかに知るため、過年度放流群のうち外部標識装着群についての再捕報告をとりまとめた。さらに、各地先で行われている種苗放流を含めた放流効果を明らかにするための一段階として、水揚げ地における黒化魚の出現割合を調べた。それらの概要を以下に記す。なお、詳細は平成3年度放流技術開発事業報告書（ヒラメ班）瀬戸内九州海域を参照されたい。

## 中間育成

4月16日および4月23日に、本県栽培漁業センターで生産したヒラメ種苗62,400個体（平均全長39mm）を水産試験場に搬入し、陸上水槽で平飼いあるいは小割生け簀を用いた中間育成を行った。その結果、標識放流追跡調査に用いる種苗として、5月7日に15,500個体（平均全長55mm）、6月18日に12,900個体（平均全長95mm）が得られた。5月中旬に原因不明の病気が発生したが、オキシリン酸投与により約10日間で終息した。

## 種苗放流追跡調査

### （放流初期生態）

開放的な砂浜海岸である阿南市中林海岸の汀線付近に、全長39mm、55mmおよび95mmの種苗を放流し、放流翌日より放流場所周辺において追跡調査（小型ソリ網試験操業）を行った。

39mm放流群では放流後10日間程度までしか再捕が続かなかったのに対して、55mm放流群では放流後40日以上、95mm放流群では放流後50日以上経過した時点においても再捕が認められた。さらに95mm放流群では、放流直後より調査海域周辺の刺網による再捕報告があった。このことから開放的な砂浜海岸でヒラメの種苗放流を行う場合、少なくとも全長55mm以上のサイズが必要であることが示唆された。

## 種苗放流追跡調査

(過年度放流群の再捕状況)

元年度放流群(阿南市橘湾放流)のうち100mm放流群(1989年7月放流)の1991年1月以降の再捕は4例あった(紀伊水道中央部・橘湾内・阿南市椿泊地先・由岐町地先)。

2年度放流群(徳島市勝浦川河口域および新町川下流域放流群)のうち100mm放流群(1990年7月放流)については、5月に1個体が小松島市横須地先で刺網により再捕されたのみであった。

## 市場調査

(水揚げ地における黒化魚の出現割合)

紀伊水道域で操業する底びき網で漁獲されたヒラメを水揚げする4市場、および橘湾内で操業する刺網・定置網で漁獲されたヒラメを水揚げする1市場で黒化魚の出現割合を調査した。総水揚げ個体数に対する黒化個体数の割合を月別にみると、前者では4.8%~33.3%であったのに対し、後者では44.4%であった12月を除けば76.9%~100.0%となった。また全調査個体を全長30cm未満およびそれ以上については10cm間隔で区分してみると、前者では13.3%~19.9%であったが、後者では66.7%~88.0%となった。このように海域による黒化魚の出現割合の差が認められたが、その原因は現段階では不明である。